

その後のお姫様

## シンデレラの場合

木原美香子

ささやかな希望と同時に、自分の足はみっともない大足なのではないかという想いを、国中の娘たちに抱かせて終わった、あの有名なお妃探し。めでたしめでたしのお約束通り、シンデレラの人生は幸せなものになるはずでした。

しかしお城には"やはり"いらしたのです。"お義母様"と"お義姉様"方が、、、。もちろんそれは、王子様のお母様とお姉様方の事です。

王子様に見初められる、これは当時の娘たちにとって上は貴族の姫君から、下はがちょう番の娘に至るまで、大変な幸運をつかむ事だったのは言うまでもありません。ですから結婚前に相手の家族構成を気にしたり、王子の性格を観察し二人が結婚した後も、未永くきちんとした家庭を営んでいけるかなんて、誰も考えるものではありませんでした。

シンデレラにしても、意地の悪い継母の元で召使い

がわりに使われ、二人の姉からのいじめに泣く生活には何の未練もありませんでした。ですから鎖を解かれた犬のように、あるいは窓から放たれた小鳥のように真直ぐに王子の胸に飛び込んだのであります。

それこそ蜜のように甘~い数ヶ月が過ぎてゆくと、シンデレラも城に於ける人間の力関係が少しずつわかるようになりました。すると、なんということでしょう。あれ程頼もしくみえた王子は、二人のお義姉様方に頭の上がない末っ子だったのです。

さあこうなると話は少し変わってまいります。大体手がかりはガラスの靴の片一方という状況の中で、なんとしてでもシンデレラを探し出すように命令した王子です。これはいつも姉上達に甘ったれながら育ってきた、弟にありがちなわがままと依頼心の顕れでした。しかも不可能に近い事を家来にやらせておいて、

自分は恋わずらいで寝込んでしまうなんて、現代のまともな女の子なら見向きもしないでしょう。

ガラスの靴を持って国中の家をまわった家来は、それこそ足には豆の畑ができる程でしたし、夜毎の夢では大小さまざま美しいのから醜いのもまで、たくさんの足にうなされるしまつでした。

それはさておき、結婚してからもポイントはすべてお三方にしっかりと押さえられていましたから、シンデレラはほとんど呆れ果ててしまいました。

シンデレラの方も、あれ程12時前にもどるように念をおされたにもかかわらず、途中で変身しながら走りつづけたような娘でしたから、初めは夫である王子がお義母様方の言いなりなのも、あまり気にはしなかったのです。しかしいくら気だてが良くて素直で呑気、いえ、大らかなシンデレラでも我慢の限界というものがありません。

ある朝のことです。食事を終えた王子は、公務につく前の一ときをくつろいですごしておりました。

『今朝は卵のゆでぐあいもよかったし、お茶の温度はとびきりだった。5月特有のすがすがしい朝には文句のつけようがないし、なんと言ってもそばにはやさしくて美しいシンデレラがいてあれこれと気をくばってくれる』

王子はバターをたっぷりもらったあとの猫のように満足していました。そこでシンデレラはさりげなく話を切り出したのです。

「ねえ、あなた。私達、このお城を離れて別のところで暮らしてみませんか」

「別のところだって??？」

王子はおどろいて叫びました。

「それは、二人でこの城から出るという事か？」

「そうですわ。小さくてもいいから夫婦水いらずで

暮らしてみたいんですの」

王子はおろおろしてシンデレラをなだめます。

「シンデレラ。何かこの城が嫌になるような事があったのかい？この僕にできる事ならなんでもするから話しておくれ」

シンデレラは王子の顔を見つめて『まあ。困った顔の王子様もチャーミングなこと』とうっとりしていましたが、はっと気を取り直して言いました。

「いーえ。嫌なことなんて何もありませんわ。ただ・・・」

と言って、シンデレラは恥かし気に目をふせました。はにかんだシンデレラは本当に初々しく、清楚なバラのつぼみのようでしたので、あまり考えることの得意でない王子は思わず

「あなたがそうしたいのならいいよ。」

と言ってしまったのです。

さあ、それからが大変でした。王子から思いがけない別居の話を聞かされたお母様は涙を流してかきくどきましたが、二人の決心が固いと知るや頭痛を起こしてお部屋に引き籠られてしまいました。お義姉様方には、

「かわいい顔をしているくせに、鬼のような（イエ、ヨーロッパのことですから）魔女のような嫁」

などと言われてシンデレラも寝込みそうになりました。

しかし、実家で培われた持ち前の我慢強さで乗り越え、二人はさんざんなイヤミと涙に送られて新しい城に移ったのです。

「独立したからには、二人で何でもきちんとおやりなさい。私達をあてにしてはだめよ。」

と出発前に念の入ったお言葉を下さったお義母様方の前で王子はとても不安でした。しかし、自分を頼りにしてくれる可愛い妃の手前、とにかく体面だけでも

取り繕わなければなりません。現代の若者のように王子も形から入るタイプだったのでしょうか、毎日玉座に座っていると、甘ったれ王子も一国一城の王としての威厳が、そこはかとなく漂うようになりました。

今度こそシンデレラは幸せでした。やがて夏も過ぎ金色にみのった小麦の刈り入れが、領地内でも始まりました。

そんなある朝、窓辺で小鳥達にパンくずを与えながら、シンデレラは王子と自分の行く末に思いをさせておりました。しかし突然、森を抜けてくる車輪の音と馬のいななきがシンデレラの幸せな想いを破りました。音の様子からすると一台や二台の馬車ではありません。

何事かとバルコニーから見おろすと、ざっと見渡したただけで十台近い馬車が、城の前庭にとめられました。あっけにとられているシンデレラの目に映ったの

は、先頭の馬車からにこやかに降り立つお義母様方の姿でした。

やはり可愛い一人息子のこと。突き放してみてもどうなるか様子を見ておりましたが、ちっとも音沙汰がない。そこでとうとうしびれを切らしての御訪問となったわけです。

「あら、可愛らしいお城なこと。きちんと片づいて。とてもよくやっていらしゃるのね。」

などとはおっしゃらないものの、お義母様方は別居の際の大騒ぎなどは、何光年もの彼方の昔の事と言わんばかりに振る舞われ、それから数ヶ月も滞在なされたのです。

こうなっては、すべては元の木編み。王子様のそこはかたない王らしさは朝日の前の霧のように跡形もなく消えてしまいました。

「また近いうちに参りますからね。あなた方もお遊びにいらして。」

という言葉を残し、上機嫌で帰って行く御三方の後姿をみつめながら、シンデレラはタメ息をつきました。

「やれやれ、王子様と二人の暮らしを味わった後だけに、お母様方の迫力もひとしおでしたわ。これからもお母様方は足繁くみえるに違いないわ。もし私達に子供が授かりでもしたら、、、きっと命名の時からもめるに違いないわ。それどころか、生まれる子供が女か男かまでも仕切ろうとなさるに違いないわ。」

シンデレラは途方にくれて、暗くなっていく窓辺にいつまでも一人、ぼんやりと座りこんでおりました。

すると、なんということでしょう。以前助けてくれた妖精の代母様が、またそのやさしい姿をあらわしたのです。そして涙をうかべているシンデレラにむかって代母様はおっしゃいました。

「かわいそうな子。もう一度私が手助けをしてあげ  
シンデレラの場合- 5-

ましよう。でも今度はドレスなんかではなくってよ。」

代母様はすぐに妖精の仲間に連絡して、やや離れた国に住む独身で、すぐにでもお妃がほしい年頃の王子をリストアップしました。それからその中でもハンサムで家柄もつりあい、性格もおとなしい、手頃な王子を二人選びました。そしてさっそくお姉様方と結び合わせる段取りをつけたのです。

一年もしないうちに二人のお姉様方は幸せな結婚をし、お母様はその仕度やら結婚後の御訪問やらで忙しく、案の定シンデレラの城には滅多にお見えにならなくなりました。だってお三方とも結婚の支度やら、お互いの新居へのご訪問やらで、十分に忙しかったからです。

これでお義姉様方にお世継ぎがお出来になれば、実家のお母様としてはなにかと忙しくなるでしょう。つ

まり、王子に集中していた三人の興味をそれぞれ分散してしまえば、事はもめることもなく片づくのです。

「さすが私のやさしい代母様。」

そうつぶやいて、シンデレラは王子様がお付き合いの狐狩りで、お城を留守をしている間、午後のおひるねをたっぷり楽しんだのでした。